戦後生活綴方教育実践における歴史教育と作文指導の結びつき
―愛知県西尾幡豆地方の杉浦敦太郎と牧富也の「調べる綴方」実践に着目して―

白井克尚

一．本研究の目的

本研究の目的は、戦後生活綴方教育実践の特質を、愛知県西尾幡豆地方の杉浦敦太郎と牧富也の「調べる綴方」実践に着目して実態を明らかにし、その歴史的意義について考察することである。

本稿で扱う戦後生活綴方教育実践とは、一九五〇年代に愛知県三河地方において展開されていた「生活綴方」の考え方に基づく教育実践である。これまでにも、愛知県下における戦後の教育実践に着目した研究[1]は、数多く行われている。しかし、それらの研究は、戦後の教育運動の動向や人物史に焦点を当てたものが多く、教育実践の具体は、十分に明らかになっていない。

土屋（二〇〇三年）は、一九二〇年代の愛知県岡崎師範附属小学校学校の歴史教育実践の特質の解明を通して、解釈型歴史学習の原型を見出している[2]。また、白井（二〇一三年）は、一九五〇年代の愛知県知多郡横須賀中学校の杉崎章の郷土教育実践をもとに、生活綴方とフィールドワークの結びつきの様相を明らかにしている[3]。このような立場からすると、愛知県下における過去の教育実践を掘り起こし、その歴史的意義を明らかにすることは、今後の教育実践に示唆を得る上でも重要なことである。

ところで、一九五〇年代はじめに、国分一太郎は、「生活綴方の教育の方が、今の社会科などとくらべて、より社会的であり、現実的であり、生活的であったのだし、日本の現実に即して、自律的であった[4]」として「生活綴方的教育方法」を主張していた。つまり、当時の「生活綴方」の考えは、「生活」の理念を追究するなかで構想され、「国語からはみ出したところに発見された新たな『国語[5]』」として捉えられたように、教科の枠組みを超えた新たな教育として提唱されたといえる。このような考えに基づく戦後生活綴方教育実践を掘り起こし、その歴史的意義を解明する必

要があろう。

では、愛知県下における戦後生活綴方教育実践は、どのように取り組まれていたのか。本稿では、愛知県西尾幡豆地方における代表的な戦後生活綴方教育実践であった杉浦敦太郎と牧富也の教育実践に着目し、実践記録の分析を通じて、愛知県下における戦後生活綴方教育実践の具体を、教育実践レベルで解明したい。

なお、本稿で引用した愛知県幡豆郡西尾中学校（現西尾市立西尾中学校、以下、西尾中）の学校文集『イトスギ』や、愛知県幡豆郡三和中学校（現西尾市立東部中学校、以下三和中）の学校文集『年間作文』などの資料は、本来ならば公開されていない性格のものであるが、愛知県三河地域における国語教育の民間教育研究サークル「形成の会」の機関誌『形成』や、西尾市史編纂委員会編『西尾市史　現代五』（愛知県西尾市、一九八〇年）において、それらの『学校文集』が資料としてたびたび登場している。したがって、これらの『学校文集』は、愛知県下における戦後生活綴方教育実践の歴史を明らかにする上で重要な資料であると位置づけることができる。

さらに、本稿で引用した生徒の作文は、西尾幡豆国語の会編『道しるべ―西尾幡豆国語の会の半世紀―』（二〇一〇年）や、神谷和正編『考える葦―先生のあしあと＝杉浦敦太郎の「国語」と「社会科」＝―』（一九九六年）の中で取り上げられているものの、その全文は公開されていない。そこで、資料中の旧漢字や旧仮名遣いを修正する範囲で、できる限り全文を掲載するように心がけた。

本稿の執筆に際し、西尾中と西尾東部中の所蔵図書を閲覧・貸借させていただき、資料収集にご協力いただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

二、愛知県三河地方における戦後生活綴方実践の興隆

一九五二年、国分一太郎は、『生活綴方と作文教育』（金子書房）の中で、「生活綴方的教育方法は、単なる国語科の作文の中だけでなく、全学校教育の全活動（国語科・社会科・理科・算数科・職業家庭科・図工科・音楽科・英語科・教科外の校内活動＝文部省のいう特別活動・コア連のいう日常生活課程、わたくしたちが大切にする自治的活動、その中での生活検討会・校外生活指導など）の中で、それらの学習活動を真に現実生活に密着したものにするために、活用されなければならない[6]」と述べていた。ここで示されているように、当時の「生活綴方的教育方法」は、教育課程全体に及ぶ考え方であったといえる。つまり、「生活綴方的教育方法」は、「国語科」の「作文」の中だけで

なく、全教科において重点的に取り組まれていたことにその特色があった。こうした「生活綴方的教育方法」に基づき、一九五〇年代前半の愛知県三河地方において戦後生活綴方教育実践が取り組まれていたのである。

一九五三年六月一三日、西尾中を会場として、西三河作文の会が中心となり、愛知県作文教育者協議会（以下、愛作教）の発足式が持たれた。参加団体は、岡崎綴方の会・岡崎いちにん会・東三河教育科学研究会・渥美作文の会・額田綴方同好会・挙母加茂作文の会・安城作文の会・学芸大綴方の会・刈谷作文の会・八名作文の会・宝飯作文の会・国語研究同志会（碧南）・明治作文の会・付属小中国語部会・西三河作文の会・西三教科研というように、愛知県三河地方における戦後の生活綴方教育サークルが結集した会であった。愛作教の中心人物であった加藤喜代治は、会の発足に関して、「中津川大会（筆者注：日本作文の会第一回大会）をきっかけとして綴方をやろうとする同志たちが各地に生れ日ましに活動が盛になってきたので、大きく組織した」[7]と述べている。そして、一九五三年八月九日には、岡崎市六名小学校を会場にして、愛知県三河地域の作文教育研究サークルが一同に会する第一回作文教育研究大会が開催された。この大会は、愛知県三河地方の熱心な生活綴方教師が中心となって組織・運営を行っていた。後に、大会関係者であった牧富也は、「杉浦・加藤らの尽力により、全三河二〇団体からなる『愛知作文教育者協議会』（代表：後藤金好・西尾中校長）が結成され、目覚ましい活動が展開された」[8]と、当時の様子について語っている。

この頃の愛知県三河地方における戦後生活綴方教育実践に眼を向ければ、「戦後の西尾・幡豆の作文の夜明けは西尾中での加藤喜代治の仕事から始まるといってよいだろう」[9]と述べられている。西尾中の国語教師であった加藤は、一九五二年の一月末に、雑誌『世界』（二月号）に掲載された「母の死とその後」（江口江一）という作文と、その「指導者のことば」（無着成恭）を読み、「生活のたくましさ、生き生きと生活の血の通ったコトバと思想、そして緊迫した生活の認識と強靭な組織の仕方」がそこに示されていたことに感銘を受け、生活綴方の指導に意識的に取り組んでいったという。そして、「私もほんの数年前に生活綴方を知り、子どもたちを綴らせながら育て、その指導を通して自己改造をなし遂げようとつとめてきたものの一人だ」[10]と述べ、戦後生活綴方教育実践に取り組んでいくこととなる。その実践の成果は、「終戦後のわが家」（西尾中　二年・加藤伊蘇志）[11]という作文に結実していった。「終戦後のわが家」の作文は、一九五一年度の読売新聞社主催の全国つづり方コンクールで最高位入賞となり、いくつかの書物に転載さ

れて、全国的な反響を呼んだという。[12] つまり、加藤実践は、全国的にも注目された実践であったことがわかる。

加藤は、「終戦後のわが家」の作文指導に関して、「『日本綴方の会』一九五一年度の全国最高位になったこの作品は、前の年やはり全国第一位だった「母の死とその後」（山形県山元中学校江口江一君）を読んだあとの感想文を発展させたものである。（中略）それを読み合ったあと、『私たちも自分自身のほんとうの生活を知るために、そしてもっとよい生きがいのある生活を建設することができるようになるために』、自分自身の今の生活を、はだかのままはっきりとつきとめてみたくなったのだった。[13]」と振り返っている。このように、加藤が、戦後生活綴方教育実践において参考にしたのは、無着成恭の『山びこ学校』（一九五一年、青銅社）という社会科の実践記録であったことが興味深い。ここからは、当時の教師の意識の中の「国語科」と「社会科」との緩やかな結びつきを指摘することができる。[14]

また、加藤は、この作文が生まれるまでに、三ヶ月間のほとんど毎日、作者である加藤伊蘇志と話し合い、学級のみんなで作文の読み合わせをしながら、原稿用紙計百枚にもわたる大作を生み出すことに成功したと振り返っている。とりわけ、この作文を綴らせる過程で特に努めたことは、「下からの証明」や「生活構造からの確かめ」であり、「子どもがまともに考えぬいてとらえた内容の『確かめ』はそのまま文の確かさになることに気がついた[15]」という。つまり、加藤実践は、作文教育を通じた生徒の「生活」の変容を重視した取り組みであったことが明らかになる。

当時、愛作教の中心的人物の一人であった杉浦敦太郎は、加藤実践に対して、「一九五二年、加藤伊蘇志の『終戦後のわが家』を中心作品とするイトスギ（筆者注：西尾中の学校文集）第二号が西尾・幡豆作文の歩みの一つの到達点として発表され、広い層から注目された。しかし、この終戦後の歩みは全く敗戦後につくり出されたものでなく、戦前の遺産（人と作品）から多くのものを引き継いだものであることはもちろんである[16]」と評価している。すなわち、加藤実践は、戦前期より取り組まれていた「生活綴方」の伝統を受け継いだ、愛知県三河地方における戦後「生活綴方」教育実践の出発点であったことが示される。[17] しかし、加藤は、翌年度、愛知学芸大学（現愛知教育大学）附属岡崎中学校に転出する。その後、加藤実践を引き継ぐ形で、愛知県西尾幡豆地方において『学校文集』の作成を通じた戦後生活綴方教育実践が継続して取り組まれていくのである。

三、杉浦敦太郎の「調べる綴方」実践

これまで述べた「生活綴方」の考えを引き継いで、愛知県西尾幡豆地方において『学校文集』の作成を通じた戦後生活綴方教育実践に取り組んだ教師が、杉浦敦太郎（一九〇八―一九八五年）であった。杉浦は、先述した愛作教の結成にも関わった人物であり、そのことから彼を、戦後の愛知県西尾幡豆地方を代表する生活綴方教師として位置づけることができる。

杉浦は、一九五三年、三和中において学校文集『年刊作文』の創刊に携わり、「郷土クラブ」の顧問として、生徒に地域の実地調査をさせて作文を書かせる実践に取り組んでいた。『年刊作文』第一号（一九五三年三月）は、「郷土の歴史や民俗を生徒の手で古老からの聞き取りや実地踏査で調べ、それを作文化して確かめていくという面に新しい開拓をした」[18]と評価されている。杉浦の指導による生徒の作文からは、彼の実践の様子が明らかになる。

以下、『年刊作文』の中から、「口上書を読んで　感想」「坂道」「おじいさんの昔ばなし」という作文を紹介する。なお、先述した神谷和正編『考える葦―先生のあしあと＝杉浦敦太郎の「国語」と「社会科」＝』には、生徒の作文の一部が掲載されているが、杉浦による実践の全体像を示すために、敢えて作文全体を載せるように心がけた。右線部は、白井が、実践の経緯を示す部分に引いた。

資料一

三和中『年間作文』Ⅱ、一九五四年三月、三九頁

口上書を読んで（本文略）

感　想　　犬塚　佐代子（二）

この手紙を読むと、封建時代の農民は実にかわいそうなものであったことがわかる。このような手紙を出して税を少しでも少くしてもらわなければならない。今はそんなことはないと思う。このような農家は、みんな一生懸命にたのんでいるのである。食べるものがなくなって死ぬぐらいの大水、ほんとうに封建時代の農民は、かわいそうであったことがだれでもわかったであろう。又私のかんづいたことは、「御」という字が多く使ってあるのに気づいた。私は知らなかったが、先生のお話によると、自分の田畑ではないからだといわれた、ほんとうにほんとうに封建時代の農民はかわいそうであった。

感　想　　村松　とよこ（二）

先生がこの手紙をわたされた時、こんなむずかしい、しかも旧よみかたでよめるかと思つたが、ひととうり読んでしまわれると。案外あ（ママ）やすくよめた。そしてこの手紙を読んでいると、その当時の人たちのえらかったことが頭にうかんで来る。その当時は封建制度がくずれかかっていたそうある。そして道をいじる時には新村までも通知がきて朝早く起きて道をいじっているところまで歩いていったそうである。昔の人はよくまあ遠いところまで歩いていったと思う。今の人ではとうてい歩いていけないと思う。

資料二

三和中『年間作文』Ⅱ、一九五四年三月、四〇頁

坂道

齋藤　税（二）

僕の家は新村山の北べたの坂をちょうど登った所にある。この坂の幅はだいたい二間ぐらいある。長さは約一五〇メートルぐらいある。ちょっと見ただけでは一〇〇メートルぐらいに見えるが曲っているのでわりに長い。

この坂で、らくな時となんぎな時がある。この山に住んでいる人は登ったり、おりたりすることが、何んでもないようである。山の下に住んでいる人、よそからきた人などはよく「なんで、こんな所に家をたてたのだろう。」と、いっている。それは新村の晃君家に昔、庄屋さんが領主様に出したかきつけが残っているが次のように記してあった。『満水の節、堤切込みの儀心もとなく御座候故御領主様へ御願い申し候て御林山を引きならし、惣村中、屋敷替え仕候に付、御田地へ甚以て遠路に相成り難渋仕候。』僕はこの文句のわけがわからなかつた。どういうことだろうと思って考えているとこの文句のわけは、だいたい『昔、矢作川が満水の時、堤が切れそうなのを心配して村の人が領主様に御願申し出て、この林山を引きならし、村中が屋敷をこの山にうつしたが田地に遠くなってなんぎい』というようなことだと思った。

この坂をおりる時、自転車のベタルをふまないで下まで行ける。朝早くごはんを食べていると坂で「キーキー」とハンドブレキの音が聞こえる。

（判読不明）うとすると班が下まで「ガラガラ」と走って行ってしまうので二人で班を引張って行かなければならない。なんぎな時は坂を登る時である。普通の平地では一人でらくらくと引いて行くのを坂をのぼる時には二人か三人で引張らなければならない。こう云う時牛か馬を飼っていると都合がよい。まあ、このへんでは馬はいないが牛は少しくらいおる。牛に車を引張らせて上って行けば非常にらくでる。僕の家には牛がいないので兄や母がよく「牛がほしい」といっている。僕も牛がほしい。

山の上には家が十六けんある。その中で牛のいる家が三げんである。この坂を九〇メートルぐらい登った所が少しまがっていて夜、月夜でない時は真暗で、もう手さぐりで歩かなくてはならないくらいである。月夜でない時、ここにあまり来たことのない人は道が、どちらに曲っているのかわからないので兩ぐろのいみじょに、おちるようなことがたまたまある。

だが今では、坂の曲っている所に電燈がついているので、いみじょにおちるような心配はいらない。夜、おそく来て電燈がとぼっていないと少し、おそがいような気がする。それは坂の兩ぐろが竹やぶばかりなので、この竹が坂をおおつていて暗いからである。電燈のついていない時は電球のきれている時である。だが、だれかがまた新しい電球をつけてくれる。

このように、この坂には不便な所や便利な所がある。まあ、不便な方が少し多いようである。だが僕は下の平地でくらすよりも山の上でくらしている方がよい。それは家で仕事などしているからである。

写真１『年間作文』Ⅰ・Ⅱ（1953・1954年）

資料三

三和中『年間作文』Ⅱ、一九五四年三月、四一～四二頁

（右線部は白井）

おじいさんの昔ばなし

金子　チヨノ

家のおじいさんは明治の前の、慶応元年（一八六五）生まれで、今年で九〇才になる。九〇年間の自分の経験のうちから、この上羽角に関係のあることをいろいろと聞いて、歴史の勉強の助けにしようとした。何にしろ、おじいさんは年寄りで、もうろくしてしまって、記憶があいまいで、あまりたくさん聞き出すことができなかったが、少しばかり次ぎに断片的に書きつけてみます。

一、**ちょんまげのこと。**　明治十年ごろ、おじいさんの十三才の時、ちょんまげを結い、十五才までは母にゆってもらい、十五才からは、前を青くするので、それは家ではやれなくて床屋へ行くのだったそうです。ちょうどおじいさんが三十才の時のころ、お上からちょんまげを切ってもよいといわれ、おじいさんはその時切ってしまわれた。ちょんまげを結っていた時の気持は、昔からの習慣で、それは気持がよかったといわれます。

二、**年貢米。**　昔は、上羽角だけ六百俵年貢として出すのだが、米が一反に三～四俵しかとれなく、年貢に困り、上羽角の中央といってよいところに、年貢米をしまっておく倉があったので、その倉へ、ぬか俵を百俵くらい入れておいた。倉に入れておく時は、ぬか俵でもよかったが、岡崎の殿様の所へおさめる時には米俵を持っていかねばならないので、苦しかった。

三、**年貢おさめ。**　その年貢米を納めるには、十五才に男がなると、米一かついで、岡崎の殿様のところまで持っていったのだそうです。今考えると、昔の人は力があったのか、上羽角から岡崎までは約二里半ある、その道を米一俵かついで、汗を流して運んで行ったとは驚くことだ。今では大人の人でも米俵をかつぐなどという事はめったにない。「火事になって、びっくりした時なら、一俵ぐらいかついで出せるそうだなあ。」とどこかのおばあさんが言っていられた、私は「そうかなあ」と思いながら聞いていたことがあった。

四、百姓と刀。　岡崎の領主は本多という殿様で高は五万石、日本中の二百あまりの大名のうちでは中ぐらいだそうです。武士は大小の刀を毎日のようにさし、農民はお祝の時だけ短かい刀を一本さしてもよい。私は農民など刀は全然ささないと思っていた。それは、豊臣秀吉が天下を統一したとき、一揆を防ぐため、刀狩を行なったから、刀など農民の手にはないと思っていたが、おじいさんの話を聞いて不思議に思った。

五、しゅうげん。　徳川時代のころ、嫁さんをもらう時には、百姓は、小さい刀を一本さしてかみしもを着て式をしたのだそうです。かみしもをつけると、姿勢がよくなり、いかにもその人がりっぱに見えたということです。女の人はつねに本髪をゆっていたので、そのなりでやればよい。

六、おじいさんの学歴。　七才から一年、中嶋の尾崎伊六郎さんのところへ行き、それから牧保さんのところへ二年行き、貝吹の庵寺に学校ができてから六年通った。はじめは寺小屋とおなじようなものであつたという。

七、天明の水害。　上羽角のような川添いではよく大水害があった。おじいさんがまだ生まれない前、天明という年号の年にもえらい水害があって、わたくしのうちの本家の金子家は深溝（ふこうず）へ移転してしまったそうです。

資料一に、「先生のお話によると」「先生がこの手紙を渡されたとき」とあるように、杉浦は、生徒に古文書を読ませ、それらの感想を書かせるという順序で作文指導を行っていたのである。資料二からは、杉浦が生徒の家の古文書を読ませ、現在の自分の家との環境を比較させて、歴史地理的な認識を深めさせていることがわかる。また、資料三からは、「歴史の勉強の助けにしようとした」というように、地域の古老であるおじいさんへの聞き取り調査を行わせたことにより、生徒が歴史認識を育んでいたことがわかる。これらの作文から明らかになる実践の特質は、杉浦が古文書を読ませたり、古老への聞き取り調査を行わせたりして、その調査内容を記録するための作文指導を行っていたことである。

以下、生徒の作文に対する杉浦の評価言を示す。なお、右線部は、白井が、杉浦の作文指導への考えが示されている部分に引いた。

資料四

三和中『年間作文』Ⅱ、一九五四年三月、三七頁

（右線部は白井）

封建の代をたずねて

新村の斎藤錠一さんのお宅に保存されてあるたくさんの古文書（こもんじょ）のうちいくつかをお借りしてきた。ここに二つをかかげて、それについての感想文を集めた。こういう作文はその時になってきゅうにうまく書こうと思ってもそれはできない。日ごろのほかの学科の勉強、特に歴史、社会の勉強がしっかり積み重ねられていなければよいものは書けない。たらないところやまちがっているというなどそれぞれ欠点はあろうが、こういうものに対してもはっきり自分の物言いができることはだいじなことだ。斎藤税君の「坂道」は、古文書に出てくる環境に現に住んでいる一人の考えとして、古文書の本文と比かくして読めば、いろいろ参考になると思う。新村が山屋敷を開いたのははたして徳川封建の代のことであろうか。山に古井や古墳らしいものがあったりするのを見れば、その前に古代には山々に住居していたのがいったん下へおり、さらに山に移ったとも考えられる。このへんも、もっと研究をすすめたい。金子チヨノさんの一文は「生きた歴史」とも言うべき老人からの聞き書きである。歴史の採集である。もっともっと多くのことを聞き出し記録してもらって、三和村の歴史研究の素材としたいものだ。

滋賀県の廿日市中学校では中学生が町の歴史を大きな本二冊に作りあげて世の人を驚かせた。三和村の歴史研究の材料が年とともに失われたり散ったりするのは残念だ。われわれの手でこまめに採集し作文にしておき、やがて一冊の「三和村の歴史」が作られる日を待とう。

資料四の中の、「日ごろのほかの学科の勉強、特に歴史、社会の勉強がしっかり積み重ねられていなければよいものは書けない。」「われわれの手でこまめに採集し作文にしておき、やがて一冊の『三和村の歴史』が作られる日を待とう。」といった言葉からは、杉浦が、作文指導の中で、郷

土の具体物を用いた歴史学習の意義を捉えていた様子が明らかになる。このような指導は、杉浦が「国語と社会の教科担任」[19]だったからこそできたことであろう。

また、杉浦は、中学校の「国語」教師でありながら、「郷土クラブ」の顧問として、生徒とともに遺跡調査を行っていたことも特徴的であった[20]。以下、杉浦の指導した三和中「郷土クラブ」の生徒による作文「土器」を紹介する。長くなるが、遺跡発見の経緯や、調査過程を示す重要な資料であるため、全文を引用する。なお、右線部は、白井が、杉浦による指導の様子が表されている部分に引いた。

資料五

三和中『年間作文』Ⅲ、一九五五年三月、二八～三一頁

（右線部は白井）

土器　　渡辺　久恭（二）

僕と広二君とある日図書室で戸棚にかざってある浅井君の持って来た土器や、貝吹から出たのやいろいろな土器を見ていた。広二君が「こんな物なら岡島の新川にあったぞ」と言ったので、「それじゃさがしに行くか」ということになった。

その日三人で西の川、新川にさがしに行った。

この新川と言うのは岡島の西を流れている川で元は小さな小川でそれを大きくして石垣を作ったので川のはばは、二間半ぐらいの川である。行って見たらびっくりした。僕はせいぜい二つか三つしか拾えないと思っていたがとても沢山あった。はじめ川の土手の上をさがした。土手の上に川の泥が上げてあるので、その中に小さなかけらがいっぱいあった。中には大きなのもあった。はじめ小さなやつも拾っていたが、しまいには大きな物しか拾わなかった。

今度は川の土手の反対の方に行って拾った。さがしているとよそのおじいさんが畑をおこしていられた。そのおじいさんが僕達の拾っているのを見て、それをどうするのかと言われた。僕達は学校へ持って行くと答えた。そのおじいさんは「どうしてこんな物が出るのだのう」といわれた。おらがはすこしもこわれていないやつを二つ拾った」と言われた。「ちょうどひょうたんのようなかっこうをしたのだ」と言われた。酒が一しょうぐらい入るのだそうです。土器の出る川の長さは七〇米ぐらいだ。今度は川の水の中に入った。水は足のかかとのすこし上ぐらいの深さだった。

水の中にはつぼのような物がたくさんある。拾ったのは川の両岸に出してかためておいた。はじめあまり熱心にやったので足がくたぶれてしまった。今度そのひろったのを川の橋へ集めた。ひろったのはいちこに二はいぐらい入るだけあった。今度この川から土を運んだ所にさがしに行った。そこにも沢山あった。拾った物を今度ひとまず川から近い広二君の家に運んだ。

もって行く時はその辺に「むしろ」の片はしが落ちていたのでそれに入れて運んで行った。それへ三回運んだ。そのあくる日学校から帰ると広二君の家へ行って拾った土器を近くにある貯水池に持つて行って洗った。その日杉浦敦太郎先生がおいでないので持っていかなかった。その日僕の家まで持って来て置いた。土器を入れる物が広二君の家になかったので、むつきかごに入れて持って来た。あくる日二人で学校に手でさげて持って行った。むつきかごなのできまりが悪かった。土器を豚小屋に入れて置いた。それから今度杉浦先生をよびに入った。先生がおいでて見てもらったら、これは

古い物だと言われた。今度稲垣（筆者注：元南山大学稲垣晋也氏）という人に土器がたまったから来て見てもらうかなと言われた。先生はこれを図書室の戸棚に入れておけと言われた。その日は僕はとてもうれしかった。授業が終ってから図書室のとだなに入れて置いた。

土器を家の人に見せたらこんな物が何になるのだと言われた。父は別として、祖母や姉はある形の土器を見せたら、これは「おかいこ」をかう時のこんろのやつだと言われた。

すこしすぎて僕達の豚当番の時、杉浦先生が今日岡島に見に行くと言われたので豚当番の者はみんな行った。その時先生に、この辺の歴史を聞いた。この辺は伝説によると、ここらがいちばん早く古代人が住みついたのだそうです。

ある日杉浦先生が、考古学を研究する南山大学の人があした行くから土器をおまえの家にまとめておいてくれと言われた。学校には形の大きないやつばかり持って行って、まだ悪いやつが広二君の家に沢山しまってある、それを僕の家まで持って来た。

学校から帰ってしばらくすると先生と稲垣という人とおいでた。僕は早速しまってある所から、その人の所へ持って行った。その 垣という人はやせ型の眼鏡をかけた人で顔がかくばったような人である。その人はこういうことを研究していられるので小さなかけらを見てもこれは元はこういうふうになっていてこれが、ここにあってそれが、ここがというふうに地面に絵を書いて説明してくださった。この土器は弥生式の土器で中期と後期にあたるそうです。古さは今から約二千年前ぐらいだそうです。

それから川に見に行った。自転車で行った。行く時広二君をよぼうと思って家にいったらいなかった。帰る時広二君は今日川に土器を拾いに行くといったから川だなと思っていそいで川に行った。広二君は川にいた。先生が「こや岡島遺せきが出来るぞ」と言われた。土をもり上げてある中に土器の破片がたくさんあった。「この川の中の土はどういう土ですか」と稲垣さんがたずねたので、僕達は川の中に入って土をほじくった。ねん土だった。大学の人はくつ下をぬいで入るしたくをしたので先生は「予供達にやってもらったらどうだね」といわれたらその人は「自分でやって見なくてはわからない」と言って川の中へざぶざぶ入ってこられた。移植ごて見たいな物で川の土をほじくって、たまたま土のにおいをかいで見られた。ちょっとほっただけで土器が出て来た。土のかたまりをかごの中に行れて置かれた。今度東の田の中に入って移植ごてで三〇センチぐらいほったら土器の破片が出て来た。そして「このぐらいが土器の屑だな」といわれた。今度てつぼうの上から、ほって土器が出て来た所までの高さを測った。一米ぐらいあった。はっきりおぼえていない。雨が降って来たのでやめて帰って来た。

家の者ははじめ、こんな物が何んだと言っていたが「今では、こや古いものだなア」といってほめている。

学校で豆をまいている時、杉浦先生が『岡島の「さかきばら」という人の家に土器のわれんやつがあるそうだで借りてこいや』と言われた。それから先生が今日南山大学の人が言われた土器の話をわかりやすく話すからクラブの時、歴史を聞きにこいと言われた。クラブの時聞きに行った。先生は話された。この西三河は石器時代の遺せきはあるが、弥生式時代の土器はとても少いけれど今度岡島でその弥生式の土器が発見されたという風に話された。もし岡島の土器の出る所をほったら、きっとこういう物が出るだろうと言って黒板に書かれた。「どうたく」「青銅器に絵のかいてある物」「くわ」「銅のやじり（ママ）「田げた」「人間の住居のあと」などと書かれた。またあそこをほるのが手間がかかるそうです。まず土器の出るふきんに鉄のぼうを入れて見て、ぼうに、ざくざくと土器

やなにかのあたる所を深く、ほそ長くほるのだそうです。ほるには、一くわで十センチぐらいずつほるのだそうです。それをいちいち「とおし」に入れて中になにか入っていないか、見ながら掘るのだと言われた。費用は五万円ぐらいかかるそうです。この土器は登呂遺跡よりも古いのだそうです。それから数日すぎてから二人で榊原さんの家にききに行った。そこの人はこういわれた。そこの家には三つあって、一つはわれていて残りの二つはどうもなっていなかった。

そこの家が「おしょうつき」をやって、その時その家の人がこういう物があると言って円満寺という寺のおしょうさんに見せたら。お寺さんはこれはいいものがあると言ってそれをくださいと言って持って行かれたそうだ。ほんとうにおしいことをしたと思った。そのわれた物は親類の子が三和中学校へ持って行ったと言われた。しばらくたったある日、先生が川にあつめてある土器を全部学校にあつめてしまうかなと言われた。僕がじゃあした持って来ようかなと言った。家に帰ると自転車で夕方取りに行った。川は水がいっぱいあった。雨に川のそばの道が洗われて、土器の破片がいっぱい道の上に出ていた。あつめておいた土器は川の中に落ちてしまってあまりなかった。それで川のていぼうに落ちている土器のかけらを拾って持って来た。その時小さな炭が落ちていた。土器の中が黒くこげているのもある。土器をあつめて家に持って来た。つぎの日学校に持って行って図書室のとだなに入れて置いた。

八月のある日、南山大学の人があしたおいでるといって来たので学校へ話しを聞きに行った。歴史のクラブの者は皆んな来ていた。杉浦先生が来て図書室にある土器を理科室に持って行くようにと言われた。それからしばらくたって杉浦先生と稲垣という人と二人で入っておいでた。まず最初に杉浦先生が南山大学の稲垣と言う人ですとしょうかいされた。稲垣さんはまず最初に石器時代から弥生式時代のことについて話された。それから、つぼ、かめ、の話をくわしく話された。土器が黒くなっているのは物をにてこげたのだと言われた。昼から室場へ行くというので僕達は弁当を持って来なかったからパンを買って食べた。昼から室場に行くついでに土器の出る所へよって行った。川は水が一ぱいだった。稲垣さんの所へ集まって地図を見た。そのとき話された。この土器の古さは約今から二千年前である。昔、ここに住んでいた人々は日常使っていた道具のこわれたのをここにすてたのである。だからこの付近をほれば、きっと昔住んでいた住居が出てくるといわれた。それから室場へ行った。稲垣さんが役場へ行ってしばらくたつと、役場の人が出て来て戸をあけてくれた。入っている所は室場の土地改良の事務所である。そこにある土器は数は少いけれど形が完全であった。この土器も川を大きくする時に出たのだそうです。出た場は二ヵ（ママ）で出たのだそうです。出る所は砂だって、そこによしの根があって川を大きくする時根がたいへん役だったといわれた。その時に土器のほかに「木のすき」が出て来たそうです。そのほか木の物が出て来たそうです。そのすきは学芸大学の人が持って行かれたそうです。お宮にすこしも、われていないのがあるから持って来ましょうと言って取りに行かれた。そのあいだに土器の出たという所に行くことにした。そこの川も水がいぱい（ママ）だった。

僕達はそこで土器をさがしたが見つからなかった。そこも一米ぐらいほったら土器が出て来たのだそうです。そこの川で小さい子供が魚をつかんでいた。今度はもう一つの所に土器が出たという所へ行た（ママ）。そこの川も水が一ぱいだ。土器は見つからなかった。そこへ行ったらもう役場の人は持ってきておられた。それはつぼですこしも破れていなかった。これを青年団が花立に使っていたのだそうです。その役

場の人はとても親切な人でした。稲垣さんは、その人に土器のことについてこういわれた。この土器はたいへんねうちがあるでだいじにしまっておくようにと、それから土器はその出た所を書いて土器にはって置くといいといわれた。稲垣さんおよび皆んなは役場の人に礼をいってわかれた。今度は平原の石器時代の遺せきを見に行くのだが僕は日が暑くて頭が痛かったのでわかれて家に帰った。
　杉浦先生がおいでなかったのは残念だった。先生の家は葬式で昼までおいでてかえって行かれた。

資料五に記録されているのは、三和中「郷土クラブ」による岡島遺跡（西尾市・環濠をめぐらした矢作川下流域最大規模の弥生集落）の発見と調査の経緯である。「先生が『こや岡島遺せきが出来るぞ』と言われた。」とあるように、遺跡を発見した感動と、教師と生徒が一緒になって地域の歴史を正確に記録しようとする姿が表現されている。また、「先生が川にあつめてある土器を全部学校にあつめてしまうかなと言われた。」というように、出土した遺物を大切に保存していた様子も伺える。『愛知県史』によれば、「これらの資料の多くは杉浦敦太郎および市立三和中学校（当時、現東部中学校）の生徒により採集され、同中学校に保管された。[21]」とされている。

一九五〇年代の愛知県下の戦後郷土教育実践の中では、三和中「郷土クラブ」の活動と同様に、教師と生徒が共に遺跡調査を行い、郷土の歴史認識を深めていたことが一つの特徴としてあった。[22] 杉浦実践の場合、戦後生活綴方教育実践の中で、地域の遺跡調査が取り組まれており、調査内容を生徒に作文として綴らせていたことに、その独自性があったといえる。

以下、杉浦による岡島遺跡に関する知見が示されている部分を示す。なお、右線部は、白井が、岡島遺跡の性格を表している部分に引いた。

資料六

三和中『年間作文』Ⅲ、一九五五年三月、三一～三二頁

僕の考え

岡島も土器の出る所は地上から約一米で室場も約一米、これから考えると同じころに、この辺、一帯に部落があったと思います。石器時代の人が進んで弥生になる。弥生式の時代では稲を作って主食にしていると思う。今までは、肉類、あわ、きび、ひえ、これらは山の場所にも出来る。しかし稲はちがう、水がなければ出来ない。それで稲は水が必要だ。それで里におりて来て田を開く、すると食物の安定がつくので狩りはあまりしなくてもいいので沼地だと考えられる。なぜかというと室場の土器の出た所からよしが出て来たのでよしのある沼地だったと思います。沼地を切り拓いて田を作り、ここで米がよく出来ると、そこらじゅうから集まって来る。一つの部落が出来る。つかっていた物がこわれると、それを皆んな一所へすてるのでそこから土器がたくさん出てくる。

資料六からは、「この辺、一体に部落があったと思います。」というように、杉浦が地域の歴史にも詳しい国語教師であったことがわかる。西尾の人物誌の中でも、杉浦は、

「生徒に郷土の歴史を調べさせたり、古老から民俗の聞き取りをさせ、さらに実地調査をして、それを作文に書かせるという手法をとった。そうした中で自らも岡島遺跡の調査研究などをし、考古学には造詣が深かった[23]」と述べられている。

以上より、杉浦実践について、次の二つの特徴を指摘することができる。

第一に、杉浦実践の中では、「郷土クラブ」によるフィールドワークの活動を通して、教師と生徒が一緒になって地域の歴史研究に取り組み、古文書や弥生土器といった郷土の具体物に触れることを通じて、地域の歴史認識を深めていたことである。そのことにより、「フィールドワークは、無意識のうちにクラブ員に対して実証主義的な視点を植え付けていきました[24]」といった成果が現れていたのである。

第二に、杉浦が、「国語と社会の教科担任」として、地域における古文書の読解や、古老への聞き取り調査、遺跡調査を行わせ、その内容を作文に綴らせることにより、生徒の歴史認識を育んでいたことである。そのことの背景には、「皇国史観から解放された戦後の自由な歴史観の中で地域の史・資料を自らの手で調べ、それを基にして地域史像を組み立てていく方法[25]」を意識的に活用していた杉浦の考えがあった。

したがって、杉浦実践は、地域の歴史研究を通じた「調べる綴方[26]」実践であったと位置づけることができる。

とりわけ、杉浦実践では、地域の歴史研究がまず重視され、その体験した内容を作文として綴らせるという方法で、生徒の歴史認識を深めていた点に独自性が存在していたと論じることができる。

四、牧富也の「調べる綴方」実践

次に、これまで論じてきた杉浦の考えを引き継ぎ[27]、愛知県西尾幡豆地方において戦後生活綴方教育実践に取り組んでいた代表的なもう一人の教師が、牧富也（一九二七―二〇一三年）であった。牧もまた、愛作教の活動に関わった人物であり、愛知県西尾幡豆地方を代表する戦後の生活綴方教師として位置づけることができる。

一九五〇年代の愛知県三河地方における意欲的な生活綴方教師たちにとって課題となっていたことが、「文集のありかた、文集の教室での生かしかた[28]」であったという。そうした問題を捉え、各学校で『学校文集』の刊行が企図され、そのトップを切ったのが西尾中の学校文集『イトスギ』第一号（一九五一年二月）であった。その中でも、第三号（一九五四年三月）に掲載された、牧

の指導した共同研究『伊藤部落の実態調査』は、「調査研究記録の先駆的作品として高く評価された」[29]とされている。

以下、共同研究『伊藤部落の実態調査』の全文を示す。なお、右線部は、白井が、調査の経過が記されている部分に引いた。

資料七

西尾中『イトスギ』第三号、一九五四年三月、二一～二三頁

（右線部は白井）

共同研究『伊藤部落の実態調査』から

二の七　野村　陽子
二の八　本多　正子

私たちは夏休、伊藤部落へ行って、「新しい農機具、農薬はどのように農村に役立っているか―伊藤部落の実態調査」というテーマで共同研究をした。夏休一ぱいかかって農家十一軒を訪問した。この調査の結果をまとめた。それが原稿用紙に六十五枚と図表七枚とになった。項目だけ書くと

一、なぜ調査を思い立つたか
二、計画はどんなに立てたか
三、伊藤部落へ
四、調査メモ。二反、四反、五反、六反、八反、九反、一町一反　一町三反、一町五反、一町八反、二町六反の十一軒の家。
五、図表をまとめる。
六、図表をまとめて。
第一、二、三、四、五、六、七の各表について。
七、調査をおえて考えたこと

というふうになっている。

調査を終って考えたこと

どうしてこんなにお百姓のことが調べたくなったのかわからないが、今まで家の中に引込んでばかりいた私たちにとって、実際の社会がすこしでもわかったような気がする。それにこういうことは多分、中学時代にしか勉強出来ないものだと思うので、夏休のほとんどすべてをかけてもおしくはない。むしろ夏休でなければやれないことを実際に行って、今までで一番よい一月間だと思っている。ただすこしおしいことに普通より進みすぎた部落だったので、もう少し進んでいない普通の百姓のことの方がいいと思った。それにもう少しつっこんで考えたいと思った。それで一つ一つについてもっとくわしく考えてみることにした。

一、「百姓根性」について

私たちは調査の前から「お百姓は聞いても余り教えてくれない。」と思っていた。そしたらやっぱり「百姓根性」というものが、あらゆる方面にあらわれて来た。私たちが聞いても「この調査はどうするのだ。」とか「よそのと一しょにしといてや。」「機械なんかしゃれたもんで、ほんなもんなんか役に立ちやへんがあ。」それから聞いても余り答えてくれない人。又見栄をはってよいことばを使う人。機械を持っている人はほらをふくようなことをいい、持っていない人は「機械なんか」といって持っている人をけなす。私たちはまず村が団結していくのに心が一つにならなくてはだめだと思うのに互にけなし合っているのだ。調査していくうちに気のついたことだが、金持ちの家はだんだん金持ちに、貧乏な家はだんだん貧乏になっていくように感じられてならない。そして田畑を多く作っていい、くらしをしている人たちは「百姓根性」が目立たず、反数の少ない人たちの方がどうも目立つこ

とに気づいた。
一体なぜこんないやな「百姓根性」を持つようになったのだろうか。
戦後、自分の家の田畑を正直にいった人が供出が多く、うそをいって反数をかくした人が供出が少い。又供出と税金とにせめられた時があったそうだ。それがよその家ばかり苦にしている農民にした。しかし今に始ったことではない。五公五民といった時代の百姓、上からおしつけられた時のようなあきらめとひくつな考え方が文明の進んで今でもまだ残っているのだ。町の者に対したり、調べがあったりすると変な顔をしてしまうのだ。女子はまた女子で、家計のくりまわしをして細かいことまでやるので、自然にけらけらして用心深い性格が出るのだ。そして皆自分の家をまもることだけしか考えなくなってしまう。
しかし、今この部落では、若い青年たちが集まって四Hクラブを作り、土の研究をしたり新しい機械を取り入れようとして研究したりしている。こんなことは昔はなかったにちがいない。そして農業協同組合なども余り活発ではないが、皆で利用し合っていけば「新しい村の少年たち」に書いてあるようなすばらしい村が生れるのではないだろうか。私たちのクラスのように、皆がかくさず話し合っていけるようにしたいものだと思う。

二、てんぴについて

調査した十一軒のうち、てんぴを使っていなかったのは二軒だけだった。てんぴとは畳一畳位の大きさのもので屋根にとりつけ、夏の太陽熱を利用して風呂水をわかすものである。私たちがびっくりしたのは、といが落ち家がたおれそうな所でさえてんぴを持っているということだ。経済に困っているような家でも、まだ町でも使われていない一万三千円もするてんぴを使うのはなぜだろうか。
夏の間は、ただくみ上げておけば太陽熱でうめなくては入れないくらいに熱くなるのでたきぎがいらない。それに田の草を取ったりすると帰りが七時頃になるので、たきぎをもやすひまがない。こんな時、汗になったお百姓には、大変便利だ。てんぴを使う前は、蚕を飼っている家では、桑をもやしたり、わらをもやしていたそうだ。ところがわらは牛のえさや堆肥になる。とくに新しい農機具を使うように成ると、牛を飼う家が多くなるので、わらはえさにどうしてもいる。それでは祭はどうか。社会科教科書の四五頁には「生糸の輸出高と桑園面積の変動」という題の折れ線グラフが出ている。みると一九四二年（昭和一七年）から急に桑園も輸出も最も多い時と比較すると三分の一以下になっている。一六年末には太平洋戦争になったので、それまでアメリカが生糸を買っていたのがなくなったからだ。そしてこの部落でも、食糧増産ということでほとんど苧畑に変えられたのだそうだ。桑は新しい枝と葉を出させるために毎年切るのだそうだが、その切られた枝がとてもいいたきものになるのだそうだ。以前はこれを風呂にくべていたわけだ。今桑がなくなったからといつて、高いたきぎを買うのは、現金収入の少い農家では大変だ。こんなわけで、太陽熱利用のてんぴはちょうど農家の願いにかなったわけである。
しかし、ある有力な農家が始めにてんぴをとりつけたとする。その人が自分の家はこんないいことをしていると自まんすると、みんながまねをする。しまいにはやらないつもりの家まで、自分の家だけやらないと気がひけるような気がして、見栄でやるということもあるのではないかと思う。しかし、よいことならそれでもよいと思う。
部落をまわった時、青年にきいたり、四Hクラブを作っている青年たちで、てんぴはいいということをさかんに宣伝し

たのだそうだ。

伊藤は土地の悪い所だ。高低があって、田がだんだんになっている。そのため水をやってももるし、肥えをやってももどってしまうので、普通一反で九俵とれるのに六俵しかとれない。でも幸なことに、農業を一生懸命考えて、少しでもよくしようとしている人がかなり多くいるので、この人たちの手によって、この部落はどんな場合にも一つ進んだ農業をするであろう。

夏休中かかってこんな研究しかやれなかったのかと笑われるかも知れないが、私たちにとっては二年生で一番良い思い出になるじゃないかと思っている。

写真2『イトスギ』
1,2号（1951・1952年）

資料七からは、「夏休一ぱいかかって農家十一軒を訪問した。」「社会科教科書の四五頁には『生糸の輸出高と桑園面積の変動』という題の折れ線グラフが出ている。」というように、牧が、農家への聞き取り調査や社会科教科書の活用などを指導して、地域の農業の実態調査を行った様子がわかる。また、「百姓根性」や「てんぴ」といった地域における前近代的な意識、農機具の導入といった農業問題を取り上げ、そのような地域の課題を、調査研究を通じて明らかにしようとしていたことも窺われる。つまり、牧実践では、生徒に地域の農業の実態調査を行わせ、地域の農業問題に対する考えを作文として綴らせることにより、その解決につながる歴史認識を深めることを目指していたのである。[30]

また、資料七の作文の作者が二人であることからも示されるように、二人の生徒が夏休みの共同研究として、ペアで学習を進めている様子も特徴的であった。この指導の経緯について、牧は、「杉浦敦太郎の助言を得て牧が二人の女生徒と試みた調査である」として、「二年　野村陽子　本多正子が、今井誉次郎の『新しい村の少年たち』（筆者注：学校図書館文庫、一九五一年）を読んで感動し、ひと夏、西尾市伊藤部落にはいりこんで行った農村調査の記録で、本文四〇〇字原稿用紙六十五枚、調査用紙二十枚、図表七枚、農機具などの写生二〇枚におよぶ大作である」[31]と述べている。すなわち、牧は、杉浦の助言を受けながら、女子生徒二人と共に調査に取り組んでいたのである。戦前期における「調べる綴方」の指導が、「集団的な調査・共同制作の方法で実践されていた」[32]ことにも共通する教育方法であったことが指摘できる。

こうした牧実践の背景には、戦前・戦後を通じて愛知県

三河地域における生活綴方教育のリーダー的教師であった後藤金好の影響が存在していたことも見逃せない。当時、西尾中の校長であった後藤は、『イトスギ』の刊行に際して、「ほんとうによい文というものは、ただペンの先で書かれるものではなく、目によって、耳によって、頭によって、手によって、足によってこそ書かれるものです。つまり、観ながら、調べながら、考えながら、味わいながら、行ないながら書かれるものです」[33]という文を寄せている。後藤は、戦前期より、「自然的対象」「人間的対象」「社会的対象」という三つの分野に分けて、「調べる綴方」に関する主張を行っていた[34]。後に、牧は、教育実践に際して、後藤の影響を強く受けていたことを振り返って語っている[35]。したがって、牧が後藤の「調べる綴方」の考えを参照にして、「社会的対象」への調査活動に意識的に取り組んでいた様子も窺われる[36]。

以上より、牧実践について、次の二つの特徴を指摘することができる。

第一に、牧実践の中では、夏休みの「課題活動」や「共同研究」という教育方法を用いて、生徒に地域の実地調査に取り組ませ、そうした活動に対する作文指導を通じて、地域の歴史認識を深めていたことである。後の牧の教え子も、「授業がすむと、子どもたちと自転車で野外へ、植物・岩石・古墳などを調べにいった」というように、フィールドワークを活用した教育活動や、「村の歴史を調べ劇化して学芸会をやったり、職員劇をやったりした」ことなどを回想している[37]。ここからは、牧が、フィールドワークや表現教育を大切にしていた教師であったことも示される。

第二に、牧実践においては、地域の農業問題が取り上げられ、そうした地域の課題を、農家への聞き取り調査を通じて解決しようとしていたことである。その成果として、地域の課題を、「生き方」の問題として捉えていく生徒が育っていた。このことより、「生活教育」をまず大事にし、教科の枠組みにとらわれることがなかった牧の姿勢を窺うことができる[38]。

したがって、牧実践に関しては、地域の「社会的事象」に対する「調べる綴方」実践であったと位置づけることができる。とりわけ、牧実践では、地域の課題を歴史的に明らかにするために、地域の実態調査がまず重視され、その内容を共同研究として作文で綴らせたという点に独自性が存在していたと論じることができる。

五．本研究のまとめ

本研究の目的は、戦後生活綴方教育実践の特質を、愛知

県西尾幡豆地方の杉浦敦太郎と牧富也の実践に着目して実態を明らかにし、その歴史的意義について考察することであった。本稿を通じて、以下の三点を明らかにすることができた。

第一に、愛知県三河地方における戦後生活綴方教育実践においては、地域の歴史の解明を目指して、教師と生徒が共同で歴史研究に取り組んでいたことである。具体的には、「郷土クラブ」の活動や、夏休みの「課外活動」の活動を通じて、教師と生徒が共同で地域の歴史を解明することを目指した歴史研究が行われ、それを通じた歴史認識形成が行われていた。また、そこで表現された歴史認識は、『学校文集』として表現されることにより、生徒同士、教師間にも共有されていたことも明らかになった。

第二に、愛知県三河地方における戦後生活綴方教育実践では、地域の社会的課題が取り上げられ、その調査内容を作文として綴らせることにより、生徒の歴史認識が深められていたことである。具体的には、地域の遺跡保存の問題や、農業の近代化などの社会的課題について、調査研究を通じてその原因を明らかにし、解決を目指そうとしていたことがあげられる。そうした指導の背景には、杉浦や牧のように、地域における社会的課題に対して問題意識をもつ教師たちが存在し、教育実践の中で意識的に取り挙げていたことも明らかになった。

第三に、愛知県西尾幡豆地方における戦後生活綴方教育実践の中では、「生活綴方」の考えに基づき、歴史教育と作文指導が結びついて学習指導が取り組まれていたことである。具体的には、国語科や社会科という枠組みよりも「生活教育」を重視した取り組みがなされ、『学校文集』作成をめざして、地域の歴史についての調査内容を綴るための教師の作文指導が存在していた。したがって、愛知県西尾幡豆地方における戦後生活綴方教育実践においては、歴史認識教育と作文指導を結びつけた「調べる綴方」実践が取り組まれていたことが明らかになった。

以上の研究の成果より、今後の歴史教育実践に対しても、次の二つの示唆を得ることができる。

第一に、社会科歴史教育におけるカリキュラム・マネジメントへの示唆である。一九五〇年代の愛知県西尾幡豆地方における戦後生活綴方教育実践の中では、教科の枠組みよりも、地域における生徒の生活に根ざした課題を解決するための教育課程が大切にされていた。ここからは、愛知県三河地域における「生活教育」の伝統を窺うことができる[29]。社会科歴史教育のカリキュラム・マネジメントにおいて、生徒の「生活」を中心に据えることの意義を、そのような点からも確認することができる。

第二に、歴史教育実践におけるアクティブ・ラーニングへの示唆である。一九五〇年代の愛知県西尾幡豆地方における戦後生活綴方教育実践の中では、生徒自身が地域の歴史を調べ、調べたことを作文として綴るというように、歴史教育と作文指導とが結びついて取り組まれていた。[40] こうした点からも、歴史学習における体験的活動の必要性や、歴史を書くことの意義を認めることができる。

以上論じてきたような戦後生活綴方教育実践の歴史的遺産に、現在の私たちが学ぶべき点は、なお多いといえる。しかし、本稿では、教育実践に焦点を当てて検討を行ったため、学校の教育課程全体の中で歴史認識の質を高めるための教科指導の位置づけについては、十分論じることができなかった。この点については、今後の課題としたい。

【註】

（1）　香村克己『戦後愛知の教育運動史―地域から綴る運動と教師群像』風媒社、二〇〇六年。酒井宏明「愛知第二師範学校附属小学校の教育課程の変遷―生活綴方教育の成立と展開を中心として―」全国地方教育史学会『地方教育史研究』第三三号、二〇一二年、六五～八二頁等を参照。

（2）　土屋武志「一九二〇年代の歴史教育実践の特質」日本学校教育学会『学校教育研究』第一八号、二〇〇三年。

（3）　白井克尚「一九五〇年代の中学校における郷土教育実践の特質に関する一考察―愛知県知多郡横須賀中学校の杉崎章の取り組みに即して―」日本学校教育学会『学校教育研究』第二八号、二〇一三年。

（4）　国分一太郎「眞実な社会科を築くために―綴方の復興について」『社会科教育』第三四号、一九五〇年一〇月、一〇頁。

（5）　永田和寛「冷戦の中の綴方復興―国分一太郎にとって生活綴方とは何か」駒込武編『生活綴方で編む「戦後史」―〈冷戦〉と〈越境〉の一九五〇年代』岩波書店、二〇二〇年、五二～五三頁。

（6）　国分一太郎「生活綴方のねらうもの」『生活綴方と作文教育』金子書房、一九五二年、二八頁。

（7）　加藤喜代治「愛知作文教育者協議会」日本作文の会編『作文と教育』百合出版、第二〇号、一九五三年九月、三四頁。

（8）　牧富也「年表『西尾幡豆国語の会』五五年の歩み」西尾幡豆国語の会編『道しるべ―西尾幡豆国語の会の半世紀―』、二〇一〇年、一五頁。

（9）　杉浦敦太郎「西尾・幡豆作文教育の歩み覚えがき」

形成の会『形成』第一号、一九七〇年三月、四〇頁。

(10) 加藤喜代治「子どもとともに生活綴方へ―『終戦後のわが家』をかかせたころのこと―」愛知作文教育者協議会『作文路線』第三号、一九五三年八月、四頁。

(11) 加藤伊蘇志「終戦後のわが家」西尾中『イトスギ』第二号、一九五二年三月、四～一二頁。

(12) 来栖良夫編『中学生の作文』筑摩書房、一九五二年、八一頁。なお、この作文「終戦後のわが家」は、一九五二年度・日本綴方の会最高位入選、読売新聞主催全国綴方の会入選となり、「母の死とその後」(江口江一)とともに、「戦後綴方の最高の達成である」と並び称されたという(後藤金好『生活綴り方の道程』形成の会、一九七四年、一一頁)。

(13) 加藤喜代治「評」前掲『イトスギ』第二号、一二頁。

(14) 例えば、著名な岡山県・月の輪古墳の発掘運動においても、「社会科」授業の代替として、発掘作業が当てられていたことも明らかになっている。詳しくは、白井克尚「一九五〇年代における戦後の郷土教育運動の地域的展開―岡山県・月の輪古墳発掘運動の中の教育実践に着目して―」兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科編『教育実践学論集』第一五号、六七～七八頁を参照。

(15) 前掲、加藤喜代治「子どもとともに生活綴方へ―『終戦後のわが家』をかかせたころのこと―」、五頁。

(16) 前掲、杉浦敦太郎「西尾・幡豆作文教育の歩み覚えがき」、四一頁。

(17) 戦前と戦後の生活綴方教育運動の連続性に着目した研究として、田中武雄「戦後山形県における『北方性教育運動』の継承」(研究代表 臼井嘉一『戦後山形県における地域教育実践の展開過程に関する総合的調査研究』(科学教育費補助金(基盤研究C)研究成果報告書)二〇一一年)等がある。

(18) 杉浦敦太郎「第一 戦後の改革 四 教育の改革」西尾市史編纂委員会編『西尾市史 現代五』愛知県西尾市、一九八〇年、四〇五～四〇六頁。

(19) 浅岡文雄「考古学者、そして歌人だった杉浦敦太郎先生」安井克彦編著『三河のペスタロッチたち―三河の風土に生きた教師―』黎明書房、二〇二〇年、二六頁。

(20) こうした教科の横断性は、戦後の愛知県下において著名な遺跡の発掘調査に関わった教師たちが、様々な教科担当の中学校教師であったという事実とも共通して興味深い。例えば、東海地方でも最も早くから行われていた須恵器窯址群である東山古窯址郡(名古屋市)の発掘調査に関わったのは、名古屋市立城山中学校の

「理科」教師であった荒木実であり、縄文海進の世界的現象を裏付ける先苅貝塚（南知多町）の発掘調査に関わったのは、南知多町立内海中学校の「美術」教師であった山下勝年であった。

（21）「岡島遺跡」愛知県史編さん委員会編『愛知県史資料編二　考古二　弥生』愛知県、二〇〇三年、五〇六頁。

（22）白井克尚「中学校における歴史研究と歴史学習の協働に関する史的考察―愛知県横須賀中学校『郷土クラブ』の実践の分析を通して―」愛知教育大学歴史学会『歴史研究』第五七号、二〇一一年を参照。

（23）「杉浦敦太郎」西尾の人物誌編集委員会編『西尾の人物誌』西尾市教育委員会、一九九五年、一五〇頁。

（24）加藤安信「杉浦敦太郎先生と三和中郷土クラブ」西尾市資料館企画展『三和中学校　歴史クラブのあゆみ―東部中学校所蔵資料展―』西尾市資料館編集・発行、二〇一三年、一頁。

（25）同前、同書、同頁。

（26）本稿では、「調べる綴方」について、「広く郷土や社会のできごとを、科学的に調査し、これを合理的・客観的な表現によってつづり、あるいは共同制作のような組織的な方法によって目的意識をはっきりさせるための教育方法として定義している（上田庄三郎「調べる綴方」日本作文の会編『生活綴方事典』明治図書、一九五八年、五七五頁）。

（27）牧は、杉浦からの影響について、「敦太郎先生の発案で「西尾・幡豆作文の会」（のちに、「西三河作文の会」に発展）をつくり、世話人を依頼された。また、「西尾・幡豆考古学の会」をはじめられ、その事務局に指名され担当した。」ことを語っている（牧富也「私見　同年代を生きた人たち」金沢ヒューマン文庫叢書・編集部編『第七回　金沢嘉市研究会　合同研究会・資料集』蒲郡市教育委員会、二〇〇〇年、五六頁）。

（28）前掲、杉浦敦太郎「西尾・幡豆作文教育の歩み覚えがき」、四一頁。

（29）前掲、杉浦敦太郎「第一　戦後の改革　四　教育の改革」、四〇五頁。

（30）このような姿勢は、一九五〇年代前半における「農村青年教師」の姿に重なるものである。「農村青年教師」については、白井克尚「相川日出雄による郷土史中心の小学校社会科授業づくり―『新しい地歴教育』実践の創造過程における農村青年教師としての経験と意味―」全国社会科教育学会『社会科研究』第七九号、二〇一三年、一三～二四頁を参照。

(31) 牧富也「『イトスギ』のあゆみ」『形成』第九号、形成の会、一九七二年九月、四四頁。

(32) 前掲、上田庄三郎「調べる綴方」、五七五頁。

(33) 後藤金好「君たちはどのように文を書くか」西尾中『イトスギ』第二号、一九五二年三月、一頁。

(34) 後藤金好「調べる綴方の理論と指導実践工作」前掲『生活綴方の道程』、一〇六頁（原文は、一九三四年）。

(35) 牧富也「西尾中学校のころ」後藤金好先生追想の記刊行会編『敬慕　後藤金好先生』一九八一年、二九七～三〇〇頁。牧富也「年表『西尾幡豆国語の会』五五年の歩み」前掲『道しるべ―西尾幡豆国語の会の半世紀―』、五一頁等を参照。

(36) 牧はその後も、『吉良町の古墳・遺跡』（自費出版、一九六一年）、『吉良町の古い仏像』（自費出版、一九六一年）などの地域の文化財の調査活動に、生徒たちとともに参加し、郷土史家としても活躍することとなる。そうした地域の歴史や文化を大切にする教師としての姿勢は、後に彼が演劇人や植物学者、歌人としても評価されていることにも関連している。

(37) 山本啓子「我が道を歩んだ熱血人、牧富也先生―教育者・植物学者・歌人―」前掲『三河のペスタロッチたち―三河の風土に生きた教師―』、一七七頁。

(38) このように当時の愛知県三河地方における中学校教師たちが、教科の枠にとらわれずに、生徒への「生活教育」を第一に考え、教育実践に取り組んでいた事実に学ぶべき点は多い。例えば、当時、新城市立東郷中学校の「社会科」教師であった中西光夫は、一九五二年に日本作文の会による第一回作文教育全国協議会（中津川大会）に参加したことにより、「作文教育開眼」し、文集活動に本腰を入れるようになったという。なお、中西光夫の「社会科」教師としての研究的位置づけは、以下の論文に詳しい。木村博一「地域教育実践の構築に果たした社会科教師の役割―愛知県三河地域における中西光夫と渥美利夫の場合―」全国社会科教育学会『社会科研究』第七〇号、二〇〇九年、二一～三〇頁。

(39) こうした点については、現在においても愛知教育大学附属岡崎小学校が、大正時代から「生活教育」を脈々と受け継いだ教育実践に取り組んでいることや、そこでの実践研究を精力的にこなした教師が、愛知県三河地域における授業研究のリーダー的存在として「生活教育」を推進する存在となっていることなどからも示される。

(40) このような教育方法は、一九五〇年代における戦後

日本の郷土教育実践にも見られた特質であった。詳しくは、白井克尚『戦後日本の郷土教育実践に関する歴史的研究―生活綴方とフィールド・ワークの結びつき―』唯学書房、二〇二〇年を参照。

【謝辞】

本研究を進めるに際し、資料の閲覧・貸借や、当時の状況の聞き取り調査に関わって、以下の方々にお世話になった。記して感謝を表したい（順不同）。平井克明様（西尾市立西尾中学校校長）、稲垣良治様（前西尾市立西尾東部中学校長）、石川雅春様（西尾市立西尾東部中学校長）、岡田和幸様（元西尾市立西尾中学校校長）。